



NIGHTMARE

ADULT ONLY

「やっぽ～社長見てるぅ？心配かけてごめんね♥
あたしは今あ…ご主人様のところで肉奴隸してま～す♥
これ見て…フフフッ♥ようやく妊娠したって判断でたんだぁ♥
これであたしは完全な奴隸になつたってことで
こうしてビデオレターを送らせてもらったの♥

ご主人様は年下のモデルの男の子なんだけど
大手芸能事務所社長の息子さんで
すっごい権力持ってるの♥
あたしがもともとご主人様を遊びに
誘ったんだけど逆にホテルで
ご主人様のチンポに調教されちゃって
今こんな感じ♥

なんで社長にこんなビデオメール
送ったかって言うと…
実はご主人様が社長のこと
前から気に入ってるんだって♥
だから社長は一緒に送った住所まで
指定された時間に1人で来てね♥

来ないとあたしがご主人様の命令で
いろんな事務所のおじさんと寝た写真とか映像を
バラまいちゃうから絶対来てよね
誰かにこのこと言いふらしてもダメだよ？

あたしは別にどうなってもいいんだけど
社長の事務所のモデルの子全員が
こんなことしてるって思われたら事務所も
みんなの人生もメチャクチャになっちゃうよね?
…社長なんだからみんなを守ってあげてよね
フフフフッ♥」



「あなたは…そう…」
若手モデルの子が業界の女性を
手巻めにして枕営業に使ってたっていう
噂は本当だったのね」
「ボクを最初に誘ってきたのは
きららお姉ちゃんの方なんだけどなあ
まあボクも仕事中にちょっと
甘えたりしてみたけど」
「…きららはどこ？」
「お姉ちゃんは『仕事中』だよ
ボクが依頼したね」
「…うちのモデルを返してもらうわ」
「そんな簡単に事が済むと思ってる?
思っていないよねえ？」
「……」

「お姉ちゃんがよくパフって
犬の話をしててね…」
ボクもペットが
欲しくなったんだ」
「……」
「それで飼うなら若くして
高い地位に上り詰めた
気位が高さがあって
それでいて適度に男を知ってる
身体の牝犬がいいなって
現役モデルみたいな生娘には
もう飽きちゃってさ」

「…私にどうしろと言うの」
「まずは裸になってよ
ペットに服着せたりする趣味は
ないからさ」
「……わかったわ…」
「ハハハツ…いいねー
それじゃ恥ずかしいところが
全部丸出しになるように
ポーズとって見せて
がに股で…ほら腋も見せてよ」
「…こう…かしら…」
「やっぱり普段相手にしてる子とは
全然違うなあ…社長も歳を
考えるとすごい若いと思うんだけど
このだらしない乳輪とか…
フフッ…処理の甘い腋とか
最高だよね」
「……」
「じゃあ服は捨てちゃうね
もう社長にはいらないものだから
ボクに着いてきて
これから社長が暮らす部屋に
案内するよ」

「ほら入ってそこに座って」
「……」
「じゃあ首輪と腕輪をつけるから
大人しくしててね」
「腕輪まで…
私を動けなくしてどうするつもり？」
「別にどうするつもりもないよ
ただほんとの犬じゃないからさ
腕もこうしておかないと逃げ出しちゃう
かもしれないでしょ」
「……」
「どのくらいこの状態が続くのか？
って思ったでしょう」
「……ええ…」
「どのくらいだろうねー
まあボクが飽きるまでかな
子供が飼うペットなんてそんなもんでしょ」
「…………トイレはどこへすればいいの」
「その辺にすれば?
ペットが定期的に病気にならないように
掃除はしに来るからさ」
「…………そう…わかったわ」
「まあ気持ちはわかるよ
だから食事はなるべく少なめにしてあげるね
明後日くらいに最初の食事を持っていくよ」
「あ…明後日……！？」
「餌でペットを躰けるのは基本だからね
じゃあちゃんと明後日まで生きててね…フフッ」



「やっぱ～社長生きてるぅ？」
「う…あ…きら…ら……」
「ご主人様に社長の餌やり
頼まれたんだけど…ゲホッ…！
臭っ！この部屋臭すぎっ！
ほんとにここで垂れ流しにしてたんだ
社長…もうちょい我慢とか…
っていっても2日も3日もは無理かぁ」
「は…早く…お願ひ…
もう…限界よ…」
「それじゃそこに横になって
仰向けにね」
「うっ…何を…んんっ！」
「よいしょっと…
それじゃ口開けてー」
「……？」
「…まさか…
きららやめっ…！」
「んんっ…あはあああああっ！
んっ…んん…っ！」
「嫌っ…あっ…ゲホッ！」
「ちょっと何吐き出してんの～！
ご主人さまがせっかくあたしの
お尻に入ってくれた食事なのに…」
「こ…こんなの食事じゃないわ…！」
「まあ確かにね～
これあたしが枕営業してきた先の
おじさま達の精液に栄養剤とか
混ぜたものだし
美味しいはないかもね～
でも用意してるのはこれだけだから
食べずに飢え死にしても知らないよ？」

「そん…な……」
「あたしたっておしりにこんなの
入れて我慢してきたんだからさ
ほらほらまだ出るよ～今度はちゃんと
こぼさないようにね」
「うぐっ…んっ…ちゅるっ…
んっぐ…！…ちゅるるっ…ごくっ…
んっ…んふっ…ふうっ…」
「アハハハハハッ！本当に食べてると～
あたしのケツ穴から出たザーメンを…
ほんと必死なんだね社長～」
「はあっ…はあっ…んちゅるるっ…ちゅばつ…」
「こぼしたのもちゃんとすすって食べなよ
残さず食べたら今度はもうちょっと早く
餌持ってきてあげるからさ」
「んぐっ…ゲホッ…くっ…！」

「はあ…はあ…うぐっ…はあつ…」
「そうそうこぼしたのも綺麗に舐めとって
アハハっ！社長本当の犬みたい」
「くっ…！んれるっ…んちゅるるっ…
んっ…ぐっ…！あ…んっ…！
な…なに…？はあん…っ！」
「ん？ああ言ってなかったっけ
それ強力な媚薬もたっぷり入ってるから
食べると全身が疼いてしょうがなくなっちゃうって」
「な…くっ…あああああんっ…！
はあっ…あっ…！」
「その状態じゃオマンコにさわれもしないね～」
「こっ…こんな薬まで使って…
私を犯すつもりなの…？んんっ…！」
「犯す？いや別に？
ご主人様はモデルの仕事で今いないし
あたしも社長に餌あげにきただけだよ」
「な…っ！う…嘘…」
「…ンフフッ…なにその顔？
社長期待してたんだ…
その何もしてないのにグチョグチョの
オマンコにご主人様のオチンポ
突っ込んでもらえるんじゃないかなって
アハハハハハッ！」
「…っ！！」
「残念でした～
ご主人様は社長のこと犯すつもり
なんて全然ないのよ
…どういうことかわかる？」
「…そんな…くぅ…んっ！」
「社長はこれからず~っと
餌を食べるたびにそうやって
悶え苦しんで
それでも1人ここで耐えなきゃ
いけないってわけ
かわいそ～」
「あ…あの子はいつ来るの…！」
「ご主人様のこと？
さあ…海外でいろいろ撮影するって
言ってたし何週間か戻らないんじゃない？」
「なんしゅ…う…そ…」
「ご主人様が戻ってくるまで
ヒトでいられるといいね社長
じゃあたしも仕事だから
あ、媚薬の効きもいいみたいだし
餌は毎日持ってきてあげるね♥」
「ちょっと…まつ…待って！
こ…こんなの嫌あああああああ！」





「うっわ酷いニオイ…
1ヶ月ぶりくらいかな?
元気にしてた社長?」
「ふうっ…ふーっ…んんっ!!
んふうううっ!おっ…男っ…!
ううっ…うんぎぐっ…!ふうっ!
男おっ…ぐっ…男おおおおっ!」
「ハハハッ!餌がちゃんと効いて…
ちょっと効きすぎたかな?」
「んふう…つ!ふうっ…男…
おっ…おねがいいいっ…!
犯してえ…私を犯してええええっ!
なんでもするつ!
ペットでもなんでもいいっ!
きららもどうだっていい!
事務所がどうなろうと知らないっ!
だからあっ…おぐっ…!チンポっ!
チンポで私のオマンコ犯してっ!
セックスさせてええええっ!
じゃないと…もう私っ…!
狂う!狂っちゃうっ!
ヒトじゃなくなるうううっ!
はあっ…ああっ!ああああっ!!!
「しょうがないなあ…ホラっ」
「あはああああああっ♥
あっ!ふごっ!んふううううっ!
ほっ…おほおおおおおおおおっ!
チンポっ!チンポ臭う!
ほっ!おほっ!ほおおおっ!
ちょうどいいっ!
これちょうどいいっ!」
「もう十分かな…きららお姉ちゃん
例のアレやって」
「はーいご主人様♥さあ社長…
あなたの今の『夢』を見せて…」



「チンポチンポチンポおおおつ♥
チンポが欲しいっ♥チンポに囲まれて♥
セックスするだけの存在になりたいっ♥♥」

「…もう心の底から堕落しきったみたいだね」
「フフフッ♥まさか社長も自分の真の願望を
覗き見されるなんて思ってないよねえ
ほんと軽蔑しちゃうな…
ここまで女として墮ちきってるなんて
社長のこと結構尊敬してたんだけど」
「いやあ…夢の形を歪ませてそれを眺める
ことができるなんてほんと最高だよきららお姉ちゃん
特に社長みたいに今までの人生努力し続けてきて
夢に手が届きそうになってる女の夢は最高だね」
「ご主人様にこんな悦んで頂けるなんて
ブリキュアになつて本当によかったぁ♥」
「それじゃ十分楽しませてもらったし
社長の夢を叶えてあげるようかな…」

「それじゃ次の企画もきらちゃんと
社長のオファー出しておきますから
いやあお二人なら別にこんなこと
してもらわなくとも喜んで
出でもらうのにな…悪いねえ社長」
「んぶふっ♥私が好きでやっている
ことですから…んちゅぷっ♥ぷふっ♥
これからも長いお付き合いに…
んっ…♥なりますし…♥」
「ハハハハツ！他のモデルの娘達も
そのうち斡旋して頂けるんでしょう？」
「ええもちろん…お望みであれば
企画でもなんでも…んっ…あはあつ♥
例のお薬を使って従順にして提供
させて頂きますわ♥んちゅるるつ♥
陵辱モノにリアルな演技が必要
でしたら薬は使わないでそのまま…」
「クククッ…ほんと社長も悪い人だ
違法薬物でしょう？アレ」
「ええ…でもその責任はすべて
ウチの事務所で取りますから♥」

「そうだ…
私にもソレ注射して
頂けます？」
「ああ…構いませんよ
増乳剤でしたかな…
確かに以前より大きく
ハリもあるおっぱいにな
ってますなあ」
「ええ…私のような年増がこの
業界で生きるためにこういった
努力も必要ですから♥」
「このカラダなら所属モデルにも
負けませんよ…いやむしろ私は
小娘より社長みたいな女性の方が
いいですね」
「ありがとうございます♥
今日もいっぱいご奉仕させて
頂きますわ♥」



「はーい並んで並んでー¹
今日はあたしのデビューAV予約会
インノーブル学園男子寮に
集まってくれてありがと~♥
男子寮の寮長さんはあたしから
説明して置いたからみんな今日は
めいいっぱいハメ外しちゃてね~♥
予約してくれたコはあたしがナマで
手コキしてあげるからよろしくね♥
で…肝心の予約券なんだけど
そこに裸でいるおはさんに射精したら
1枚もらえるからそれを持って
こっちのカウンターにまで来てね
そしたらあたしが手でシてあげる
そのおはさんはセックス中毒の
内便器だから好き勝手しちゃってね
そのおはさんもAV女優だから
キミの子種で妊娠したらそのまま
ボテ腹モノとか出ちゃうかもね~♥
あー言い忘れてたけど1人3枚までね
3枚予約した人はあたしが3回シて
あげるけどそのおはさんにも3回
射精してあげてね♥
じゃ~みんな順番守って仲良く
びゅっぴゅしてね~♥」

「あつはあ…すごい…若い
チンポがこんなに沢山…♥
さあみんな来てえ~ん♥」
「よし…俺は2枚だから2回…
おはさんおっぱい使うよ」
「なんだよお前マンコ使わないの?
じゃ俺もらい~」
「おい後ろ詰まってるんだから
ケツ穴も使えよ！」
「フフフ…厳しい学園だけあって
童貞丸出しの男子はっかりね
どう?社長どんな気持ち?」
「んふうつ…あああんつ♥
いいわあつ♥普段相手にしてるおじさまの
オチンポもいいけどお♥みんな思い思いにっ♥
ズコバコしてくれてつ…んあんつ♥
若いチンピって最っ高おおおつ♥」
「あっそ…せいせいあたしに感謝してよねえ
こんなにチンポ集まつたのも
あたしのおかげなんだしさ
あと口の聞き方気をつけてよね
あたしはご主人様の奴隸であんたは
ただの便器なんだからさ」
「はひいっ！ありがとうございましゅううつ♥
きららとご主人様のおかげで私は今最高に
幸せですううつ♥」

「はーいほらピュッピュつ♥
次のAVも買ってねえ～♥
…まだこっちもやってるみたいね」
「んふふう～つ…もっど…んちゅるるるるつ♥
もっとチンポお…んふうつ…んふうううつ♥」
「あれえ？ 手コキしてあげたコもいるじゃん
こんな化け物みたいな改造おっぱいのババアでも
オールオツケーな女だと需要もあるみたいね
それともノーブル男子は変態が多いのかな？
どっちにしろ少し妬けちゃうなあ…
…あれ？ ご主人様から連絡きてた…」
「んっ♥んほおおおつ♥
おつ♥おほつ♥おおつ♥♥」
「はーいみんな聞いて～
あたしからみんなにお願い♥」
コレの飼い主が
もうこの便器いらないって
言うから代わりにこれの
飼育を頼みたいの♥
撮影のとき以外は好きに
していいからさ～
…あ、オツケー？
助かるわ～♥
じゃ社長また
撮影のときに
迎えに来るから
その時までそのコ
達と楽しんでて」





「やっほ～社長～
撮影日だから迎えに来…うわあ…つ
ひっどい臭い…今日もまたお盛んなこと
定期的にプレゼントしてた増乳剤も
効きすぎじゃない？これ…
乳首にチンポ入ってるじゃん
これでまた仕事取れそうだね～
お腹もしっかり大きくなってるし
これなら今日の撮影もはっちりね
…聞いてる社長？」
「あひへへえつ…もっとお…もっと
チンポおつ…あひひつ♥ひひひつ♥」
「幸せそうな顔しちゃって…
まあいつだか見た社長の夢のとおりに
なれてよかったです」



「こんなポーズでいいのぉ?
元モデルとしてはなんかな~」
「んひゅーっ…ぶひゅっ…ぶひゅーっ…♥
ちっ…ちんぼお…まだあ…?」
「まーだよ、待てよ待て
ほんと動物みたいになっちゃって…これなら
まだバフの方がよっぽど聞き分けいいじゃん」
「ほおーっ…♥待て…待つ…おひゅっ…♥」
「すいませ~ん!『コレ』もう限界みたいなんで
はやめに本番お願ひできます~?
っていうかニオイきつくて…ツーショットは
もう勘弁してほしいなあ」
「んふひいいっ♥ほんばんっ♥ほんばんんっ♥
ちんぼっ♥はやくちんぼっ♥おほっ♥おほほおおっ♥」